

〔課題演習報告〕

学年チームの機能を高める研究
ー学力向上プランを具現化する「共有」・「協働」のマネジメントを通してー

伊 藤 満 美
Mami ITO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻学校運営リーダーコース
那珂川町立安徳北小学校

(2017年1月6日受理)

本研究は、学年チームの機能を高めていくために、学校が目指す学力向上の目標達成に向けて学力向上プランを具現化する体制である「学年会」を中心とした「学年主任者会」、「課題別担当者会」の3つの協議の場、「共有」・「協働」の観点から働きかけていくマネジメントの在り方を明らかにすることを目的としている。そのために、計画・実施・評価のマネジメントサイクルに沿って、チームの行動指標を設定し、チーム活動を強化するマネジメントや3つの協議の場において、協議会の企画、運営に関するマネジメントを行った。その結果、教員の行動指標が共有、強化され、学年チームの機能の高まりに一定の成果が得られた。

キーワード： 学年チームの機能、学力向上プランの具現化、「共有」・「協働」、行動指標

1 主題設定の理由

(1) 現代の学校経営の課題と先行研究から

中央教育審議会学校の組織運営に関する作業部会「学校の組織運営の在り方について」の審議のまとめ(2004)では、「主体的な特色ある学校づくりが求められ、そのための学校の権限の拡大が図られているなかでは、学校が自らその権限を責任を持って適切に行使していかなければならない。それを実現するには、個々の教職員の活動をより有機的に結び付け、組織的な学校経営を行う体制を整えることが必要である。」と述べられている。

文部科学広報(2014)「学校のマネジメント力強化の取組」には、「様々な役割と経験年数、専門性を持ったメンバーが協働し、いかに学校の目標実現に向けて、主体的に行動できるか。一人のトップが動かす組織ではなく、一人一人のメンバーのやりがいと主体性を引き出し『チームとしての力が高い組織』をつくることで、学校のマネジメント力を高めていくことが求められています。」とある。

中央教育審議会(2015)「チームとしての学校

の在り方と今後の改善方策について」には、「チームとしての学校」の必要性について、「以上のような状況(教育課題)に対応していくためには、個々の教員が個別に教育活動に取り組むのではなく、学校のマネジメントを強化し、組織として教育活動に取り組む体制を創り上げるとともに、必要な指導体制を整備することが必要である。」と述べられている。

古川(2004)は、チームの理想的な状態を「仲のよい円滑な人間関係や協力、自己の役割を超える行動をとれるだけでなく、成員同士の知的刺激や意見交換によって、新たなことを学習し、新しい発想や創造性を生みだし、活動に移すことができるチームの状態」としている。

学校を取り巻く様々な課題に対処していくためには、一人一人の教職員が、組織的な連携のもとに自らの役割を主体的に果たし、チームとして力を発揮していくことが求められている。

(2) 在籍校の実態から

在籍校は、児童数 734 名、学級数 26 学級(特別支援学級 5 学級を含む)の中規模校であり、1, 2, 3 年生は 4 学級、4, 5, 6 年生は 3 学級で構成されている。教員の年齢構成は 30 歳以下の若年層教員が全体の約 3 分の 1 を占めている。

本校の学年チームは、学年主任以外は若年層で構成された学年が多く、学年主任の負担は大きく、学年主任の力量に学年経営が左右されやすい。そのような学年においては、一人一人のチームメンバーの個性や特技を生かした役割分担、協働的な活動、チームメンバー相互のコミュニケーションを活性化させる方が求められている。

在籍校の本年度の重点目標として、「考えを出し合う力を育成する学校システムの構築」が設定されており、子どもの学力向上に向けて、学年チームが機能的に動いていくことは、組織目標の追究につながる。

以上のような在籍校の実態を受けて、学年チームの機能の在り方の解明を本主題として設定する。これらを解明することにより、学年チームメンバー一人一人の主体的行動を引き出し、学年チームの相乗的な教育効果を生み出すものと考えられる。

(3) 1年次の研究の成果と課題から

1年次の研究では、「学力向上プラン」を具現化するマネジメントを行い、学年チームの機能の高まりを「共有」・「協働」に着目して検証した。特に、「学力向上プラン」を具現化する体制として、「学年会」を中心とし、「学年主任者会」、「全体会」を設定し、計画・実施・評価のマネジメントサイクルに位置づけ、協議内容の提案、協議を深めるための支援等のマネジメントを行った。また、学年チームにチームの行動指標を提示し、学年チームの機能を高めるための具体的な行動について共有した。

結果、学年チームの機能を高めるための行動指標が教員に共有化されてきた。また、3つの協議の場を設定し、学力向上プランを具現化したことで学年チームの機能の高まりがうかがえた。しかし、学力向上プランの具現化の要因を行動指標と関連づけながら内容の見直しをすること、個々のメンバーの役割の自覚を高めるために、学年相互で取組を交流したり、協議したりする場が必要であること、などの課題があった。

以上のことから、本年度は、チームの行動指標の見直しを行うとともに、学力向上プランを具現化する体制を再整備し、学年チームの機能の高まりを検証することとした。

2 研究主題・副題の意味

(1) 「学年チーム」とは

学年チームとは、単なる同一学年の学級担任の

集まりではなく、学年の教育課題や経営課題の解決に向け、互いの個性を理解し合いながら協働することによって、相乗的な教育効果を生み出す集団のことである。

(2) 「学年チームの機能を高める」とは

学年チームの機能とは、課題解決に向けてチームメンバーそれぞれが自己の役割を意識し、協力し合いながら活動していく働きのことである。そのためには、課題解決の目標や推進計画、推進状況や成果等を理解し合う「共有」の活動とともに、チームメンバー全員による目標設定や推進、評価改善を行う「協働」の活動が不可欠である。

学年チームの機能を高めるとは、課題解決のマネジメントサイクルである計画、実施、評価段階における活動の中で、表1の指標に示す「共有」・「協働」の基本的行動を日常的に活性化していくことである。

表1 「共有」・「行動」の基本的行動指標

〈計画段階〉	
共有	チームの課題や目標、課題解決の方策は、メンバー全員が理解している。
協働	チームメンバーは、課題や目標、課題解決の方策について、互いの意見を出し合い、プランを作成している。
〈実施段階〉	
共有	課題解決の方策や進捗状況は、メンバー全員が理解している。
協働	チームメンバーは、プランに基づき、互いにアイデアを出し合いながら、役割遂行に向けて、自律的に行動している。
〈評価段階〉	
共有	取組の成果や改善点については、メンバー全員が理解している。
協働	チームメンバーは、互いの意見を取り入れながら、取組の成果や課題を明らかにし、新たな改善策を生み出している。

(3) 「学力向上プランを具現化する」とは

学力向上プランを具現化すると、児童の学力向上を目的として、学力向上プランに掲げた具体的な取組を「計画・実施・評価」のマネジメントサイクルに沿って実践していくことである。

本校の「学力向上プラン」は、学校が目指す学力向上の目標や方策等を受けて、各学年チームが、学年の子どもの実態とつまずきを分析し、「創造的な授業の日常化」、「内容の定着・習熟の日常化」の2つの項目から具体的な取組の方策を構想したものである。

【創造的な授業の日常化】

- ・算数…単元構成の工夫、一単位時間の工夫
- ・国語…読解力、表現力を身に付けさせる工夫

【内容の定着・習熟の日常化】

- ・朝の学習…算数、国語の基礎・基本の徹底
- ・家庭学習の定着

(4) 「学力向上プランを具現化する『共有』・『協働』のマネジメント」とは

学力向上プランを具現化する「共有」・「協働」のマネジメントとは、学校が目指す学力向上の目標達成に向けて、学力向上プランを具現化する体制である「学年会」、「学年主任者会」、「課題別担当者会」の3つの協議の場で、「共有」・「協働」の観点から働きかけていく方途である。「学年会…学年の担任で構成し、学力向上プランを具現化する中心となる会」、「学年主任者会…学年主任で構成し、学力向上プラン全体の企画、調整をする会」、「課題別担当者会…各学年の担当者が構成し、学力向上プランの課題を解決する会」である。この3つの会を図1のようにマネジメントサイクルに位置づける。

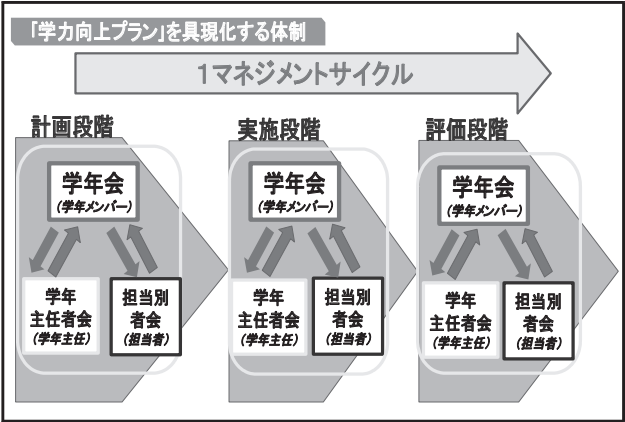


図1 「1マネジメントサイクル」の構想図

3回のマネジメントサイクルで、学力向上プランの具現化を行う。

- I サイクル… 5月～7月（1学期間）
- II サイクル… 8月～12月（2学期間）
- III サイクル… 1月～3月（3学期間）

具体的なマネジメントの方策は、〔3つの会の「共有」・「協働」の行動指標（次ページ表2，表3，表4参照）の作成，提示〕や3つの会において，〔協議内容の企画〕，〔資料の収集と整理〕，〔協議を深めるツールの提供〕，〔協議の振り返りと評価等〕について支援・援助〕をしていくことである。その役割は，学力向上コーディネーター，主幹教諭，研究者で構成する学力向上担当者が担う。

3 研究の目的

学力向上プランを具現化する「共有」・「協働」のマネジメントを通して、学年チームの機能の高まりを明らかにする。

4 研究の仮説

学力向上プランを具現化するマネジメントサイクルにおいて、学年チーム構成員の行動を「共有」・「協働」の観点からマネジメントすれば、チームの行動指標に基づくチーム行動が強化され、学年チームの機能を高めることができるであろう。

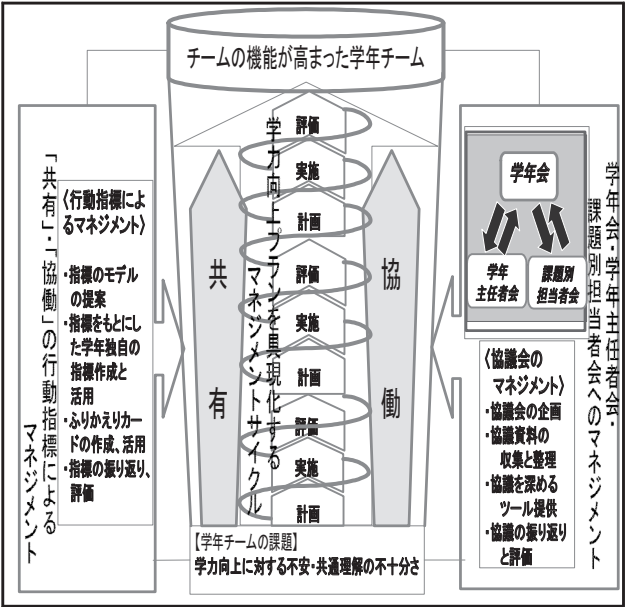


図2 研究構想図

5 仮説説明の具体的方策

- (1) 学力向上プランを具現化する体制の整備
- (2) 「共有」・「協働」の行動指標の設定と活用によるマネジメント
- (3) 「共有」・「協働」の行動を強化するマネジメント

6 研究の実際

- (1) 学力向上プラン具現化する体制の整備
 - ① 研究体制の再整備
今年度から「学力向上プラン」を具現化する体制として、「学年会」、「学年主任者会」に加えて、新たに「課題別担当者会」を設置した。管理職，学力向上担当で協議し，学年学力向上プランを作成した後から，実施することとした。
 - ② 学年チームに関する教員の意識調査

実施日	平成 28 年 5 月 24 日
対象者	学級担任 21 名，特別支援学級担任 5 名，担任外教員 3 名（計 29 名）
調査目的	本校教員における学年チームの「共有」・「協働」の行動実態や意識等について把握する。
調査方法	4 件法による調査用紙での回答，自由記述

調査項目	①「共有」・「協働」の基本的行動指標(表1) ②「職務遂行状況」(福岡県教育センター「学校経営の15の方策」の調査項目を使用)
------	--

学年チームの行動については、「共有」と「協働」を比べると「共有」の結果が低く、「チームメンバー全員が理解すること」に課題を感じていることが分かった。「職務遂行状況」については、「子どもの学力を高めることができるか」という設問については低く、個人としては自信をもって取り組めていないことがうかがえた。

(2)「共有」・「協働」の行動指標の設定と活用のマネジメント

①行動指標のモデルの提示

ア)「学年主任者会」の行動指標

【実施日】平成28年4月27日
【実施内容】行動指標のモデルを提示し、学年主任者と協議して一部内容を変更した。

表2 「学年主任者会」の行動指標

計画段階	共有	作成の目的や意義を意識して、プランの形式やプランの作成方法等を全員で確認している。
実施段階	協働	より効果的なプランになるように、互いに意見を出し合っている。
評価段階	共有	学年の進捗状況を交流し、お互いの学年の取組等について全員が理解している。
	協働	互いの取組について、アドバイスしたり、意見を取り入れたりして、見直している。
	共有	取組の評価の仕方を確認し、報告会に向けての準備等を全員が理解している。
	協働	的確な評価や改善策を生み出すことができるように、アイデアを出し合っている。

(昨年度との変更…太字下線)

イ)「学年会」,「課題別担当者会」の行動指標

【実施日】平成28年5月24日
【実施内容】全職員に「学年会」(表3),「課題別担当者会」(表4)の行動指標を提案し、理解を図った。

表3 「学年会」の行動指標

計画段階	共有	子どもの実態を把握し、学年の課題や目指す目標を全員が理解している。
実施段階	協働	子どもの実態から目標や具体的方策等を意見を出し合い学力向上プランを作成している。
評価段階	共有	学力向上プランの進捗状況について、交流し、全員が把握している。
	協働	進捗状況を確認し、方策が適当であるか等、アイデアを出し合い見直している。
	共有	学力向上プランの成果や改善点について、交流し、全員が理解している。
	協働	取組の課題から、アイデアを出し合いながら、新たな改善策を生み出している。

表4 「課題別担当者会」の行動指標

計画段階	共有	各学年の課題や目指す目標を全員が理解している。
実施段階	協働	課題別の取組について、意見を出し合いながら、よりよい内容を考えている。
評価段階	共有	各学年の進捗状況や課題別の取組内容について、全員が把握している。
	協働	課題別の取組内容について、アイデアを出し合い見直し、改善している。
	共有	課題別の取組の成果や改善点について、交流し、全員が理解している。
	協働	課題別の取組の課題から、アイデアを出し合いながら、新たな改善策を生み出している。

②行動指標の活用の促進

ア)各学年の「学年会」行動指標の作成と活用

【実施日】平成28年9月上旬
【目的】各学年独自の行動指標を作成し、学年会に活用する。
【マネジメント】9月7日の「学年主任者会」で学年主任に行動指標のモデルをもとに各学年の行動指標を作成し、学年会で活用するよう提案した。

5年生「学年会」の行動指標		
共有	子どもの実態を把握し、学年の課題やめざす目標を全員が理解している。	【放課後、子どもの様子を伝え合い、実態を共有したり、アイデアを出し合ったりして、目指す方向を確認している。】
協働	子どもの実態から、目標や具体的方策等について意見を出し合いながら、学力向上プランを作成している。	【週1回(月曜日)に次の週の計画や今後の見通しについて話し合っている。役割を決めて、アイデアを出し合い検討している。】
共有	学力向上プランの進捗状況について、交流し、全員が把握している。	
協働	進捗状況を確認し、方策が適当であるか等、アイデアを出し合い見直しをしている。	【学年会で進捗状況を交流し、検討している。】 【検討したことをもとに、改善を図りながら実践している。】

図3 5年生の「学年会」の行動指標

〈考察〉

各学年とも、「学年会」のモデル指標をもとに、これまで行ってきたことを「共有」・「協働」の観点から整理して、図3のような具体的な行動指標を作成していた。この作業を通して、計画、実施、評価の各段階で何を行えばよいのかが明確になり、メンバー全員で共通理解を図ることができた。

イ)「ふりかえりカード」の活用

【実施日】平成28年9月7日
【目的】「課題別担当者会」終了後、「ふりかえりカード」に感想等を記録していき、自分の行動を振り返るようにする。
【マネジメント】カードを作成し、課題別担当者会で提示した。記入後はカードを集め、その内容について整理し、学年主任者会等で紹介した。

ふりかえりカード		学年会、学力向上の取組について関わる自分の行動について記録し、振り返ってみてはどうでしょうか。
※「学年会」での学年チームの行動		年 []
実施	共有	※「学年会」での学年チームの行動
段階	協働	※「学年会」での学年チームの行動
〈行動メモ〉		※「学年会」での学年チームの行動
日にち	ふりかえり	※「学年会」での学年チームの行動
9/7	4年生の朝学で取り組んでいる「きくきくドリル」は、きくきく力を付けていくのによいと思った。子どもたちにも「きくきく」で取り組むようにしたい。子どもたちにも「きくきく」で取り組むようにしたい。	※「学年会」での学年チームの行動
10/26	アクティブラーニングの交流は、ペア→グループ→フリーへの発達段階が学年で見えてよかったと思う。その中にみんながわかる!! わかった!! 楽しい!! がくり返し味わえると一緒に「解こうとせず、みんなで取り組む、試行錯誤をいやがらない子どもたちが育つのではないかと」思います。	※「学年会」での学年チームの行動

図4 課題別担当者会「ふりかえりカード」

〈考察〉

「ふりかえりカード」を作成したことで、感想や考えたことなどの積み上げになった。課題別担当者会で取り上げられた内容等を、自分の学年にも活かそうという「協働」の意識がうかがえた。ウ)「自己評価カード」としての活用

【実施日】1回目：平成28年8月4日
2回目：平成28年12月21日

【目的】「学年会」、「学年主任者会」、「課題別担当者会」における自分の行動やチームの行動について振り返り、評価して、次の行動につなげる。

(※4件法による回答)

【マネジメント】「学年会」、「学年主任者会」、「課題別担当者会」の行動指標を評価カードとして提示し、自己評価したものを集計し、結果を示す。(図7参照)

〈考察〉

行動指標を用いたことで、自分自身の行動やチームの行動を「共有」・「協働」の観点で評価することができた。

(3)「共有」・「協働」の行動を強化するマネジメント

① [計画段階 (I サイクル)] のマネジメント

[ア] 学年主任者会 5/18 → [イ] 学年会 5/25

ア)「学年主任者会」へのマネジメント

【実施日】平成28年5月18日

【目的】学校の学力向上プランについて確認し、学年学力向上プランの作成状況や作成上の問題点等について協議する。

【マネジメント】事前に、教頭、主幹教諭や学力向上コーディネーターと、学年主任者会の内容について協議し、提案プリント等を作成した。

【実施内容】

前回の学年主任者会で提示した学年学力向上プランをもとに各学年のプランを作成し、作成状況や作成する上での疑問点等を出し合い協議した。各学年とも学力向上プランの作成途中であり、記入の仕方や評価基準の考え方などについて意見交

換された。

表5 「学年主任者会」の協議内容

T:取組についてどんな方法で評価をするのですか。

6年:市販テストの点数で評価します。

3年:数値で評価できない内容もあると思います。

4年:視写については、目標字数を調べて評価します。

〈考察〉

評価基準について学年主任同士の活発な意見が交わされた(表5)。このことは、事前に学年の学力向上プランについて学年会で話し合い、参加してもらったからであると考えられる。効果的なプランになるように意見を出し合う、「協働」の姿がうかがえた。また、評価基準の設定方法等を「共有」することができ、学年の学力向上プランを作成する上で効果的であった。

イ)「学年会(4年生)」へのマネジメント

【実施日】平成28年5月25日(4年生)

【目的】学年学力向上プランを作成するため、子どもの実態から具体的方策を協議する。

【マネジメント】評価基準の作成について、具体例を示して提案やアドバイスをする。

【実施内容】

子どもの課題を受けて、算数の学習においての具体的方策とその評価方法や基準を協議した。評価基準の定め方については、学年主任が「学年主任者会」で協議したことを学年メンバーに提示し、4年生ではどのように決めるかを話し合った。

表6 4年生の「学年会」の協議内容

○意思表示をしない子どもが多い。発表の様子では評価しにくい。

→算数の表現力についてはノートの記述で評価

○算数の授業構成をもっと理解する必要がある

〈考察〉

表6のように、学年メンバーで、具体的な子どもの姿を取り上げながら、方策や評価基準を作成することができた。事前に「学年主任者会」で学力向上プランの作成状況や作成する上での疑問点等を話し合ったことで、「学年会」では、メンバー全員で共通理解をしたり、意見を出し合ったりしてプランを作成する、「共有」・「協働」の姿が見られた。

② [実施段階 (II サイクル)] のマネジメント

[ア] 課題別担当者会 → [イ] 学年会 10月中旬

ア)「課題別担当者会」へのマネジメント

【実施日】平成28年8月4日

【目的】各学年の担当者で、担当学年の具体的な取組について協議したり、各学年の進捗状況を交流したりする。

【マネジメント】紹介する取組を考え、担当学年と打ち合わせをし、資料等を作成し、準備した。

【実施内容】

3年生の担当者が、朝学や家庭学習の取組を紹介し、実際に問題を解いたり、質疑応答をしたりして、担当者全員で理解を深めた。

表7「課題別担当者会(8/4)」後の感想

- ・3年の宿題は多様な内容があり、工夫されていた。
- ・宿題については、教師間の共通理解が必要。
- ・線引きは、1年生でもできるのでやってみよう
- ・各学年での取組を見せ合うことで、具体的なイメージをしやすいと思った。

【実施日】平成28年9月7日

【目的】各学年の担当で、各学年の具体的な取組について協議したり、進捗状況を交流したりする。

【マネジメント】紹介する取組を考え、担当学年と打ち合わせをし、資料等を作成、準備した。「振り返りカード」を準備し、感想等を記録していくようにした。

【実施内容】

4年生の担当者が、朝学の「きくきくドリル」の取組を紹介し、実際に音声を聴いて問題を解いたり、質疑応答をしたりして、理解を深めた。「アクティブトーク」について、各学年の取り組み方について交流した。

表8「課題別担当者会(9/7)」後の感想

- ・「きくきくドリル」は子どもたちには楽しんで取り組めるだろうと思った。
- ・「聴かないと解けない」ようになっているので、集中力アップにつながる。
- ・聴く力を伸ばす必要性を感じた。

〈考察〉

3年生、4年生の具体的な取組を紹介し、実際に体験することで、内容やその効果を共有することができた。「自分の学年でも取り入れたい」等の感想(表7、表8)からもうかがえる。

イ「学年会(2年生)」へのマネジメント

【実施日】10月中旬(2年生)

【目的】各クラスの取組状況について共通理解し、学年全体の進捗状況や課題等について協議する。

【マネジメント】学年主任に、1学期の課題を受けての2学期の重点的取組や「課題別担当者会」での他の学年の様子等を話題にしてもらうよう、事前に話をした。

【実施内容】

1学期の課題となっていた「学習規律」や「自己表現」について、各クラスの様子について出し合い、今後、重点的に取り組んでいくことが決められた。また、3年生の「線引き」の取組が話題

となった。

表9 2年生の「学年会」の協議内容

- 学習の「物構え・身構え・心構え」を徹底する。
- まず、大きな声で挨拶、発表ができるように。
→発表カード、かけ算九九のテストなど。
- 朝学で3年生の「線引き」を取り入れよう

〈考察〉

「課題別担当者会」で紹介された3年生の取組を2年生でも取り入れるようになった(表9)。

「定規を使って素早く正確に線を引く」という取組が、2年生の子どもにも効果があると考えられたからである。学年メンバーで考えを出し合う、「協働」の姿がうかがえた。

③[評価段階(Ⅱサイクル)]のマネジメント

【ア】学年主任者会 11/30 → 【イ】学年会 12月中旬
→ 【ウ】学年主任者会(目標達成中間報告会) 12/22

ア「学年主任者会」へのマネジメント

【実施日】平成28年11月30日

【目的】中間目標達成報告会へ向けて、2学期の評価の仕方や報告会のもち方について協議する。

【マネジメント】事前に、教頭と担当で報告会のもち方や報告会までの準備等について協議し、提案した。

【実施内容】

各学年の取組状況報告の後、「目標達成中間報告会」のもち方について協議した。評価の仕方としては、「学年メンバー個人で評価をして学年全体で話し合うこと」、「報告会では評価の根拠となるものを示すこと」などを確認した。

イ「学年会(4年生)」へのマネジメント

【実施日】平成28年12月中旬

【目的】2学期の取組について協議し、評価をする。

【マネジメント】報告会へ向けて、メンバー個人で評価ができるようにプランのチェック表を作成し、配付した。

【実施内容】

個人で評価したチェック表(図5)を持ち寄り、2学期の取組を評価基準にあわせながら振り返っていった。また、子どものノートやテストの結果等を提示しながら、評価をしていった。

中間報告会に向けて [4 年 / 組]					
2 つまづきをもとにした具体的な方策					
(1) 創造的な授業の日常化					
	つまづきをもとにした具体的な方策				
	1	2	3		
評価	【トライの場面】 ・実際に解いた後、わからない所や難しい所、前時との違いなどを出し合う場を設ける。 評価基準 [90%以上→A 80%以上→B それ以下→C]	A	A	/	A
	【アクションの場面】 ・自分の考えを図・式・言葉などを結びつけて学習ノートに表現させる。 評価基準 [90%以上→A 80%以上→B それ以下→C]	B	A		B
	・交流場面において、二人組で説明し合う中で、必要に応じて相手を増やし、考えを深めることができるような交流を位置づける。 評価基準 [90%以上→A 80%以上→B それ以下→C]	B	A		B
	【チェックの場面】 ・問題に向き合う時間を保障し、問題解決の過程をポイントを使って表現させる。 評価基準 [90%以上→A 80%以上→B それ以下→C]	C	B		B
国語	【読みの単元では、めあてに対する自分の考えを書かせる場を設定する】 評価基準 [90%以上→A 80%以上→B それ以下→C]	B	B		A
	・学習ノートに大切なことを書いたり、自分の考えを書いたり、友達との				

図5 4年生メンバー個人のチェック表

前回の学年主任者会で、評価の仕方や報告会のもち方などを協議し、学年会で評価をしたことで、各学年から具体的な子どもの姿を示しながら報告がされたり、質疑応答が行われたりした（表 10）。会終了後には、「昨年度よりも協議が深まった」、

図8 全学年チーム「共有」「協働」の調査結果（5月と12月の比較）

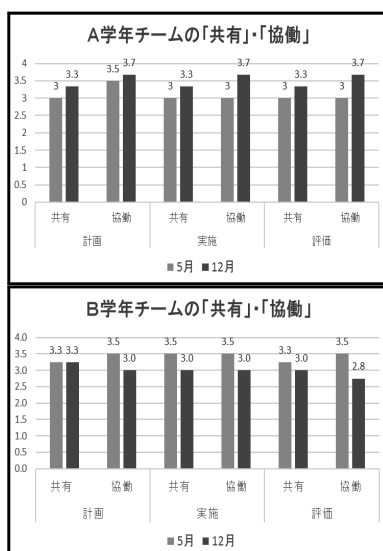


図9 A、B学年チームの調査結果

「課題別担当者会」を設置し、学年メンバー全員が関わる体制をつくったことも一因である。特に、A学年チームにおいては、「共有」・「協働」とともに伸びており、学年会が機能していた成果であると考えられる。B学年チームは、「協働」に課題があり、学年主任者会等に働きかけていく必要がある。

②教員の職務遂行状況調査結果

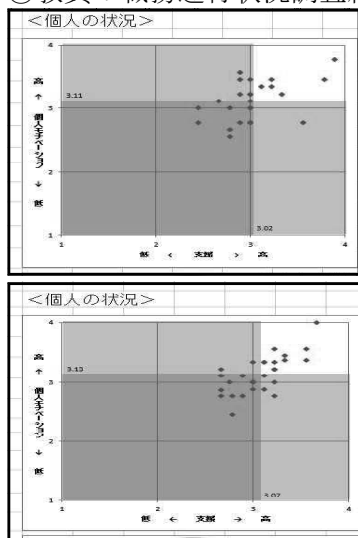


図10 教員の職務遂行状況

(個人の状況) 上段: 5月, 下段: 12月

向上に向けて努力していることが分かった。また、集団要素では、「集団のモチベーション」について平均値域の拡大がみられ、「集団の効力感」については5月と変わらず高得点であった(図11)。これは、「学年会」を中心に、学年メンバー全員で学力向上プランの具現化を図ってきたことの効果であると考えられる。しかし、「集団維持」の「共通理解」については、平均値に達しておらず、学年メンバー全員で「共有」するには、学年主任者会等への働きかけや十分な時間の確保等が必要である。

A学年メンバーの状況は、ほぼ平均値域付近に

学年チーム全体では、同数か伸びがみられた。これは、繰り返し学年の取組について話し合ったり、改善したりしてきた効果である。「共有」と「協働」を比べると、「協働」の伸びが大きく、学年メンバーそれぞれが主体的に行動した成果であると考えられる。それは、

分布していた。その中で、一人のメンバーは、個人の状況については平均値より低かったが、集団の状況は平均値域にあり、学年チームメンバーの相互支援によるものだと考える。一方、B学年メンバーの状況をみると、個人、集団の状況とも分布に二極化が見られた。これは、「共有」・「協働」の行動に課題があったからだと考える。

図11 教員の職務遂行状況
(集団の状況) 上段: 5月, 下段: 12月

8 成果と課題

- 「学年会」を中心に、「共有」・「協働」の観点からマネジメントを行ったことで、学年チームの行動指標が共有、強化され、学力向上プランが具現化でき、学年チームの機能の高まりがうかがえた。
- 学年チームによって多少のばらつきがあるので、その要因を分析し、学年主任者会へ働きかけるなど、組織的対応を検討していく必要がある。

主な引用・参考文献

- 古川久敬 2004 「チームマネジメント」日本経済新聞出版社
福岡県教育センター編 2014 「学校経営 15 の方策」ぎょうせい
文部科学省 2004 中央教育審議会学校の組織運営に関する作業部会 「学校の組織運営の在り方について」審議のまとめ
文部科学省 2014 文部科学広報「学校のマネジメント力強化の取組」
文部科学省 2015 中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」

謝辞

本研究をまとめるにあたり、研修機会を与えていただき、ご支援をいただきました福岡県教育委員会並びに、那珂川町教育委員会に心より感謝申し上げます。また、在籍校をはじめとして関係の諸先生方には、多大なるご協力をいただいたことに、深く感謝申し上げます、謝辞といたします。